

近代日本の政治的文学者と国文学的ナショナリズム の諸相：沼波瓊音、三井甲之、久松潜一の学問と思想

木下，宏一

<https://doi.org/10.15017/1807127>

出版情報：九州大学，2016，博士（学術），課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏名	木下 宏一			
論文名	近代日本の政治的文学者と国文学的ナショナリズムの諸相 —沼波瓊音、三井甲之、久松潜一の学問と思想—			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	松本 常彦
	副査	九州大学	教授	清水 靖久
	副査	九州大学	准教授	波瀾 剛
	副査	九州大学	准教授	西野 常夫
	副査	熊本大学	准教授	坂元 昌樹

論文審査の結果の要旨

本論文は、序論、本論（三章）、総論から構成されている。序論は、論文の課題・視座・対象について述べている。本論は、第一章「沼波瓊音の学問と思想」、第二章「三井甲之の学問と思想」、付章「久松潜一の学問と思想」から成る。総論は、論文全体のまとめと今後の課題について記す。ちなみに、本論の第三章に当る章を付章としたのは、沼波と三井の「学問と思想」について評伝的に全体像を追跡した第一章および第二章と異なり、久松の場合は、戦時期の「学問と思想」を中心に沼波や三井との関係から考察するというアプローチの仕方の違いを反映してのことである。論文の質や量の面で付属の扱いをしているわけではない。

本論文の課題は、東京帝国大学文学部国文科出身で世代が異なる三人の文学者、沼波瓊音（1877-1927）、三井甲之（1883-1953）、久松潜一（1894-1976）を対象に、彼等の政治的言論とその活動を国文学的ナショナリズムとして検討・考察することにある。戦前の東京帝国大学文学部国文科の学問・思想が果たした「国学」的機能の全体像については、安田敏朗『国文学の時空』（2002年）、笹沼俊暁『「国文学」の戦後空間』（2012年）、品田悦一「排除と包摂—国学・国文学・芳賀矢一」（2012年）などにより検討されてきたが、アカデミズムの外部にも視野を広げ、国文学研究とナショナリズム的な言論活動を架橋するプロセスを特定の人物の言論を追跡するかたちで具体的に描き出す作業は、この種の研究の課題となっていた。本論文の学問的意義は、沼波、三井、久松の言論と活動の調査を通して、そうした課題に応じるとともに、「新国学」の形成を国文科第一世代の芳賀から沼波や三井を介して久松に至る系譜として描き出した点にある。

資料を渉猟した評伝的スタイルで記述される「本論」は、沼波、三井、久松それぞれの国文学的ナショナリズムの特色について、同時代言説との関係および官学アカデミズムとしての国文学の文脈との関係から描き出している。

第一章は、俳諧研究者で芳賀矢一や藤岡作太郎に続く帝国大学の国文学第二世代である沼波について、明治後期から大正前期にかけての文学的・宗教的な煩悶から、大正中期に急激に右傾化し、革新右翼の源流とも評される猶存社系の国家主義運動に身を投じる過程と新たに「国学」を提唱していく軌跡を資料から跡付けている。その際に、沼波が俳諧史研究で文芸理念として上島鬼貫「まこと」を発見し重視したことが、その後の沼波の言論活動に連なっていくという指摘を行うなど、国文学研究から「国学」への経路や背景を説明している。

第二章は、帝国大学の国文学第三世代で、歌人で右派の論客でもあった三井甲之に焦点を当て、明治後期から昭和初期にかけての言論活動と思想形成について「反漱石」「ヴント心理学の受容」「親

鸞思想の受容」という多角的視点から検討し、「しきしまのみち・ことのはのみち」としての「国学」や「今中」という独特の理念を提唱するに至るまでの過程とその特質を描き出している。

付章では、東京（帝国）大学文学部教授で戦前から国文学界を領導した久松潜一が、戦時期に「新国学の主なる提唱者」として沼波と三井を認め、「真に自主的な日本学問」は、その「系譜」上にあるとして「今日の国学」「新国学」を構想したことを指摘し、芳賀・沼波・三井・久松という「系譜」の問題性を抽出している。

本論文は、上記の内容を通じて①官学アカデミズムとしての国文学研究がナショナリズムと合流する背景、②国文学研究がナショナリズムの諸潮流と交流する具体的様相および変容の過程、③在野で尖鋭化した国文学的ナショナリズムが官学アカデミズムに還流する経緯について、いずれも具体的資料を証例にして明らかにしている。

以上から、論文調査委員会では全員一致で、本論文が地球社会統合科学府の博士学位（学術）論文として十分な水準にあると判断した。